

氏 名	笹森 博貴
学 位 の 種 類	博士 (医学)
学 位 記 番 号	甲第 6 1 0 号
学位授与年月日	令和 5 年 3 月 1 5 日
審 査 委 員	主査 教授 田村 研治
	副査 教授 宮城 聡
	副査 准教授 鞆嶋 有紀

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

卵巣漿液粘性性腫瘍(SMBT: seromucinous ovarian borderline tumors)は2014年のWHO分類から新設された、比較的稀な腫瘍である。その遺伝子学的研究は世界でも散見されている程度であり、日本人における解析は未だなされていないのが現状である。本研究は、日本人における SMBT の遺伝子変異の検索を初めて行うことを目的とした。婦人科病理学者によるセントラルレビューの結果、30症例のうち7症例が除外され、SMBT23症例について検討を行った。KRAS、BRAF、PIK3CA、ERBB2 遺伝子の検索はサンガーシーケンスにて既知の hot spot における変異を特定し、がん抑制遺伝子である P53、ARID1A、PTEN は免疫染色で評価を行った。KRAS、BRAF、PIK3CA、ERBB2 遺伝子の変異はそれぞれ 4.3% (1/23)、8.6% (2/23)、8.6% (2/23)、17.3% (4/23)であった。P53、ARID1A、PTEN の変異は 26% (6/23)、4.3% (1/23)、0% (0/23)であった。既存の報告では KRAS、ARID1A 遺伝子の変異が指摘されていたが、本研究の結果、日本人における SMBT の腫瘍形成には p53、ERBB2 が重要な役割を果たしている可能性が示された。既存の報告と本研究との結果の相違は、SMBT の正確な診断の困難さ、日本人と他の人種との人種差の影響が考えられる。本研究の強みは、日本で初めて SMBT の遺伝子検索を行った点であるが、今後は、より多くの症例で、次世代シーケンスを使用したさらなる研究が望まれる。